

## 皮膚外科と形成外科

朝村真一

形成外科は『外表面の形態異常』、すなわち全身の「目に見えるおかしなところ」を取り扱うのが、形成外科の分野となります。日本の形成外科の先達である三木威勇治先生は「形成外科とは身体外表の形態異常や欠損を治療する外科で、形および機能を正常化する目的をもって同時に精神的劣等感を取り去る役目をもっている」と記しております。

形成外科学会認定専門医の資格として必要な手術項目には、(1)熱傷、(2)皮膚腫瘍・母斑、(3)顔面外傷（骨折を含む）、(4)先天異常およびその他の疾患、(5)口唇・口蓋裂、(6)瘢痕拘縮、瘢痕ケロイド、(7)美容外科、(8)手外科などが含まれます。手外科は整形外科とオーバーラップする分野があります。また、これらのほかにも、他科の医師との共同作業として、悪性腫瘍（頭頸部癌、乳癌など）広範囲切除後の再建術なども行っています。

形成外科の歴史は意外なほど古く、紀元前500年ごろインドで著された「スルタ大医典」には鼻削ぎの刑を受けた人に対する造鼻術（インド法）が、300もの外科手術法および8種類の手術区分と共に著述されています。その後、これらの医療技術はアラビア、ギリシア、ローマへと伝わり、特に医学の発達したギリシア、ローマ時代には、美と健康を重んじる芸術として形成外科手術が

尊重されていました。19世紀初頭、医学の他の分野の発達により、欧米の各国で形成外科手術が盛んに行われるようになりました。近代的な形成外科学の著しい発達は、第一次世界大戦の時です。それまでの戦いとは趣の異なる、高度に機械化された大型の大砲から発射される榴弾や機関銃が多用され、兵士たちは塹壕に隠れて戦わなければならなかったのですが、首から上は露出を避けられないために、顔面外傷、顎骨骨折、広範囲組織欠損といった戦傷を負うことが非常に多かったそうです。この時イギリスは、他国にさきがけて兵士たちの顔面創傷の重大さを認識し、専門の病院まで建てて治療にあたりました。それまで顔面創傷といえど他の傷と同様に縫合手術をするだけであり、これでは縫縮によるだけでなく癒える過程で傷の周囲の皮膚が収縮し、顔面の変形を生じさせてしまうものだったのです。イギリスは帰還後の兵士たちの生活を考え、顔面をできるだけ元の形に復元すべく、皮膚移植法等様々な方法を開発することに専念しました。これが医療分野としての形成外科を確立することにつながったのです。

形成外科が取り扱う疾患は、1) 先天形態異常 2) 外傷 3) 腫瘍 4) 美容外科に大別されますが、皮膚外科分野は、上記の2)、3)に相当すると考えております。皮膚外科は、マイナスの状態を解剖学的に正常な状態にする分野であり、美容外科は、正常より美しい状態を求める形成外科の一分野です。

あり、病気ではないので自費診療となります。

外科医は科学者であり、職人であります。外科学は形成外科学から始まったことを理解しなければなりません。その理由は、「近代外科医の父」と評されるアンブオアズ・パレの行った銃弾創の新しい治療法および創傷治癒に対する考え方は、形成外科そのものなのです。形成外科医は、キズをもっと綺麗に仕上げたい、ケガも腫瘍切除により、他人が振り返る変な顔も、分からないくらい元の状態に戻したい、失った鼻や乳房も、完璧につくってあげたいと想うのです。形成外科の手術は、まさにつくりものであり芸術であります。

日本形成外科専門医を取得している医師は全国約2500名にのぼりますが、和歌山県下において、その専門医は、私と講師の和田仁孝先生を含めても数名であります。最後に、わたくしのキャッチフレーズでもある、形成外科は患者さんの「心」を変える。和歌山県における形成外科の普及と発展に努めますので、よろしく願い申し上げます。